

曹洞俳壇

選・村松五灰子

秋あかね一人遊びの子のやうに

静岡県 小泉八千代

評 「夢中で遊ぶ幼児のように」と。表現が明るくメルヘンたつぷり。軽やかな映像が浮かび、楽しい一句が成った。

連れて舞ふ終の恋かも秋の蝶

北海道 川上 初子

評 恋は明日への希望。しかし逃れざる間近に迫る冬。秋の蝶に哀れさと慈しみの情である。

◆ 桑の実を味はつてゐる里帰り

三重県 西村 廣視

◆ 妻の座の長し上手に秋刀魚焼く

東京都 矢野 祥子

◆ いす坐禅すすめられをり文化の日

北海道 堺 隆

◆ 食堂に僧の打ちたる走りそば

千葉県 鈴木 英子

◆ 只今に返る声なし蟬しぐれ

福島県 鈴木嘉志雄

◆ 海渡る蝶のひと時藤袴

三重県 刈屋奈良美

◆ 痛みなき目覚めに安堵冬近し

兵庫県 待元 明子

◆ 鯛雲背負ひ災禍の汚泥掻く

岩手県 関合 新一

◆ 目印は赤い靴下運動会

和歌山県 田崎よし子

◆ 新しい闇に始まる鉦叩かねたた

東京都 野村 信廣

*選者吟

梅越しの目と目の少し触れもして

五灰子

*作句小見

平成二十八年十一月、与謝蕪村のお墓のある京都の金福寺を訪ねました。

思いのほか小寺で、それがとても好もしく思えました。

紅葉も美しく芭蕉がよく訪れたという庵。蕪村の墓は写真で見たように妙に逞しいお墓でした。

少しの時間でしたが充足の刻を得ました。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

震度六わが家襲えど木造の築百五十年よくぞ堪えたり

鳥取県 山本 浩一

評 平成二十八年も、日本列島は四月の熊本地震、十月の鳥取地震と大地震に見舞われた。余震も長く続き、被災地の方々の心労は如何許りかと思う。築一五〇年の堂々たる家屋敷が浮かぶ掲出歌には深い安堵感が滲む。数詞が効果的に使われている。

娘を逝かせし友と吉野の昏れ早き空を見てをり共に黙して

奈良県 横井 正子

評 逆縁の友の悲しみに寄り添って、暮れゆく吉野の空を眺める作者。友との信頼関係の深さが偲ばれる。「共に黙して」には如何なる慰めの言葉にも勝る強い心の絆を感じる。

◆大空のかすかな疲れ冬銀河も一度戻ろうあの道が好き

東京都 鈴木 正作

◆廃業の養殖の漁具放らるる更地のほとりに待宵草咲く

岩手県 阿部 瀬子

◆風強き岸辺の道をベダル漕ぐ青年の髪黒きたてがみ

岐阜県 後藤 進

◆里人のそば刈り時を鶴渡るヒマラヤ越えの風の鳥とふ

神奈川県 小橋 幸

◆大空へ佐渡へと根を張る冬の虹波間に零す七色の光

新潟県 星野 三興

◆家族七人賄う野菜この年はひとまず叶い仕舞い畑打つ

岩手県 穴戸さとる

◆実むらさきの彩増す門のとじしまま今日も昏れゆく路地風のこし

愛知県 田中 澤子

◆草紅葉ふみつつ稲架竹片付けし遠き想い出褪せることなし

兵庫県 前田あつ子

◆病室の窓のガラスに映る顔父によう似たそらまめの形

東京都 野村 信廣

◆生やさねばならない理由が見つからず毎朝ひげを剃れるすがしさ

福岡県 三吉 誠

*選者詠

転生を果しし杳き人なるか山の玻璃戸に張りつく白蛾

ちづ

*作歌小見

冬の澄んだ星空の瞬きを「かすかな疲れ」と捉えた鈴木さん、強風の中、自転車漕ぐ青年の髪を「黒きたてがみ」と喩えた後藤さん、どちらにも詩的眼差しが感じられます。今月の投稿歌は、いつにも益して力作揃いで楽しませて戴きました。



大本山永平寺



涅槃会ねはんえ

二月十五日は、お釈迦さまがお亡くなりになられたことをお偲
びする「涅槃会」です。

そのため永平寺では、一日から十四日までの半月の間、夕べの
おつとめの代わりに、「ぶつしはつねはんりくせつしやうかうききやう仏垂般涅槃略説教誡經（遺教經）」をお唱
えします。

「遺教經」とは、お釈迦さまのみ教えのあらましを、最後の説
法として伝えるものです。

この中でお釈迦さまは、「私の滅後は、はろだいもくしや波羅提木叉（日常生活
をととのえる教え）を大師としなさい、もし私が更に生きようと
も、これを大師とします」と、お示しです。

永平寺をお開きになりました道元禪師さまもまた、「ふだう仏道（仏
の安らかな生活）は人人の脚根下なり（あなたの日常の生活にあ
る）」とお示しです。

私たちは、朝起きてから夜寝るまで、心に任せて生活をしてし
まうものです。一時でも、休むことがありますでしょうか。

お釈迦さまはじめ道元禪師さまは、一息一息に生活を修行すれ
ば、誰でも仏の安らぎを味わえる、とお示しです。生活修行と仏
道（仏の安らかな生活）は、一枚のものなのです。

永平寺の修行僧は、三六五日、道元禪師さまのみ教えに自分を
すっかり投げ入れて生活修行をしています。

修行僧たちは、二度とない一息一息を、仏の安らぎを、命がけ
で味わっているのです。

ご本山だより



大本山總持寺



せつぶんついなしき 節分追儺式と涅槃会

二月三日（金）は春の訪れを告げる「節分追儺式」です。總持寺では、大祖堂だいそどうに於いて袴姿の有名人や年男年女など二〇〇〇人を超える人々が参詣され、盛大に行われます。

最初に江川禅師さま大導師のもと、厳かにご祈禱法要が行われます。そして法要が終わると、禅師さまの「福はうち」の発声を合図に一齐に豆がまかれ、たちまち堂内は賑やかな歓声と熱気に包まれます。豆まきの後、福引抽選会も行われ、人々はそれぞれの福をいただいて家路につかれます。

十五日（水）はお釈迦さまのご命日、「涅槃会」です。總持寺では十二日から十四日まで「涅槃会報恩摂心」が行われます。また、一日より十四日まで毎夕大祖堂東側室中に大涅槃図を掲げて全山の僧が集まり、『遺教経』と『舍利礼文』が読誦されます。

涅槃会当日は、江川禅師さまが大導師を勤められての法要が厳粛に営まれ、お釈迦さまのご生涯を偲びます。

涅槃会が終わりますと、修行に一定の節目をつけた修行僧が、それぞれの出身地に帰る時期を迎えます。そして入れ替わりに新しい修行僧が続々と上山して来ます。

去る者と来たる者の時期が世間一般より早めに行われるのが、修行道場の特徴といえましょうか。